

精神障害当事者の語りが学校教育にもたらす意義

- 精神障害当事者が病いの体験を通して伝えたいこと -

桃山学院大学 栄 セツコ (2721)

清水 由香 (大阪市立大学大学院・3900)

キーワード：精神障害当事者の語り・中学生・共生社会

1. 研究目的

近年、精神疾患に対する早期介入の有効性が強調され、中学生を対象とした精神保健教育の試行的実践がみられるようになってきた。演者らは、2006・07年度大阪市就労支援等モデル委託事業の一つとして「教育現場における精神障害者の語りに関する事業」を行ってきた。事業終了後も精神障害当事者で構成される語りベグループ「ぴあの」を結成し、研修・実践・成果報告を柱として活動を強化してきた。その成果として、精神障害当事者の語りの聞き手である中学生自身のメンタルヘルスへの関心の向上と精神障害者に対する理解促進があげられた。一方、語りを行った精神障害当事者自身にも、自己肯定感や自己効力感の向上および精神疾患観の肯定的変化がみられ、リカバリーを促進する結果となった。このように、精神障害当事者の語りは聞き手と語り手の双方に一定の成果がみられたものの、精神障害当事者が語りのなかで伝えたい内容について明らかにされていない。

そこで、本研究は、精神障害当事者の語りの内容に着目し、精神障害当事者が病いの体験から精神疾患の好発時期にある中学生に伝えたいことを明らかにし、今後の精神障害当事者の語りが学校教育にもたらす意義について提示することを目的としている。

2. 研究の視点および方法

1) 情報提供者：精神障害当事者の語りベグループ「ぴあの」のメンバー10名である。性別は「男性」4名で「女性」は6名である。年齢は「30歳代」が3名、「40歳代」5名、「50歳代」「60歳代」が各1名である。全員が教育機関で病いの体験を語った経験がある。

2) 調査方法：語りベグループ「ぴあの」では、2009・10年度の研修で「中学生に伝えたいこと」をテーマにグループディスカッションを重ねてきた。それをふまえて、本活動の事務局がある地域活動支援センターにおいて、2時間程度のグループインタビューを3回実施した（2009年7月、2010年3月、11月）。

3) 分析方法：まず、インタビューの録音データをもとに逐語録を作成し、重要と思われる語録をカードに書き留めた。次に、これらのカードを演者らで構成されるワーキンググループ（精神保健福祉領域の研究者2名、事務局担当者である精神保健福祉士2名）でKJ法を用いて同質性の高いコードにまとめ、カテゴリーリストに整理した。その結果、『語りべが抱く学生像』『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』『病いの体験からの学び』『共生社会の実現に向けた協働』の4つのカテゴリーが抽出され、下位項目としてサブカテゴリー、重要アイテムを図解した。そして、結果の信頼性を保つため、情報提供者によるメンバーチェックを行った。

3. 倫理的配慮

情報提供者に本研究の趣旨、インタビュー内容を録音すること、個人名が特定されないこと、研究以外の目的では使用しないこと、インタビューに回答しなくとも語りの活動等に不利益がないことを口頭と文書にて説明し、賛同が得られた場合同意書を交わした。

尚、本研究は大阪市立大学の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施している。

4. 研究結果

1) 4つのカテゴリーの関連性

抽出された4つのカテゴリーは『語りべが抱く学生像』『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』『病いの体験からの学び』『共生社会の実現に向けた協働』である。精神障害当事者は教育現場における語りの実体験やマスメディアの情報から『語りべが抱く学生像』を描き、その中学生に対して『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』と『病いの体験からの学び』から、『共生社会の実現に向けた協働』を伝えたいとしていた。

2) 精神障害当事者が中学生に伝えたいこと

精神障害当事者は【日常生活におけるストレスフルな体験】と【ストレスフルな環境】が重なり【精神の不調を体験】するが、「対処方法の欠如と内なる偏見」のために混乱を生じていた。この『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』を経て、【個人的な病的体験や生活のしづらさの体験】に加え、【精神科特有の治療環境】のなかで不安感が高まるものの周囲の理解が得られないまま、認知された無力感や学習された孤立無援感の経験が加わりパワーレスな状態になっていた。パワーレスな状態にある精神障害当事者は、ありのままの自分を認めてくれる場や社会関係および機会を通して回復に向かうなかで、【病いの体験から得たもの】を認識していた。このような『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』と『病いの体験からの学び』の経験をもとに、精神障害当事者は精神疾患の好発時期にある中学生に対して、精神病は【誰でもかかる可能性がある病気なので、自分のこととして考えてほしい】【病いになっても、自分らしく生きることが可能であることを知ってほしい】【病いをもっている自分らしく生きることができる関係性を形成してほしい】を特徴とする『共生社会の実現に向けた協働』を伝えたいことが明らかになった。

以上のように、精神障害当事者は精神疾患の好発時期にある中学生に共生社会の実現に向けた協働を願っており、精神病がありふれた病気であること、精神病を患ってもリカバリーが可能なこと、病いの有無にかかわらず相互尊重・相互支援の関係性が重要なこと、を伝えたいとしていた。このことから、精神障害当事者の語りは聞き手である中学生自身のメンタルヘルスへの関心を高めるとともに、一人ひとりが共生社会の実現に向けて参画する意識を醸成し、相互理解に基づく人権意識の向上に寄与することができるといえる。本報告は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「精神障害当事者の『語り』の有効性に関する研究(課題番号 21530628: 代表 栄セツコ)」の研究成果の一部である。